

1. 新しい技術

1) 新しい野菜「リーキ」の栽培法

北海道立総合研究機構 道南農業試験場 研究部 生産環境グループ
地域技術グループ

1. 試験のねらい

リーキは、地中海沿岸原産の野菜であり、西洋ねぎあるいはポロねぎと呼ばれ、欧米では家庭料理などの一般的な食材である(図1)。リーキは、スープなどの具材に用いられ、加熱調理すると強い甘みやとろみを呈することが特徴である。

国内のリーキの需要は年間を通してあり、外食産業向けの生食用が中心である。一方、供給については国内では小さな産地あるいは少数の農家が栽培しているものの、ほとんどが輸入である。リーキの市場価格は、海外産が850～1,050円/kgの範囲であるのに対し、国内産は概ね90～1,050円/kg程度であり変動が大きい。これは、国内産の生産量が少なく入荷が不規則なこと、また国内ではリーキは葉鞘径が太いものが好まれ、概ねこの太さが価格に反映されているためと考えられる。したがって、海外および国内産の価格差や供給量から、国内の生産量を増やし価格差を埋めることにより、輸入の代替と収益増が見込めると考えられる。

リーキの栽培は、育苗、定植、培土などの管理作業がねぎとほぼ同様であり、共通の資材や作業機械の使用が可能である。このことから、リーキは新規作物として比較的容易に導入できると考えられる。

本稿では、既存のねぎの栽培技術を応用したリーキの栽培法を示す。

2. 試験の方法

リーキは、葉鞘径の太いものが好まれることから、高単価が期待できる葉鞘径3cm以上の調製収量を多く得ることを栽培目標とした。リーキの栽培は、表3のように行い、葉鞘径3cm以上の調製収量を多く得るための株間(5、10および15cm)および窒素施肥量(20、25および30kg/10aを分施)を検討した。

3. 試験結果

リーキは、チェーンポットによる育苗・定植が可能であり、定植時の作業性向上のため剪葉が必要であった。リーキの株間を5、10および15cmで検討した結果、5cmは葉鞘径が細く、15cmは腐敗病による枯死が原因で調製株率および調製収量が低かった(表1)。このことから、株間10cmが葉鞘径3cm以上の調製収量を多く得るのに適していた。

株間を10cmとした場合、窒素施肥量を25kg/10a(基肥:分施=15:10、N25分施区)とすると、葉鞘径3cm以上の調製収量(2012および2013年に、それぞれ2.0および3.4t/10a)を多く得ることができた(表2)。

以上より、株間および施肥の検討をふまえたリーキの栽培法を示した(表3)。

露地ねぎを栽培している生産者が本栽培法によりリーキを導入する場合、資材費はねぎとほぼ同等であった。葉鞘径3cm以上の調製収量を2.0～3.4t/10aとし、その販売単価を450円/kgとした場合、10aあたりの販売収入は900～1,530千円/10aと試算され、10～12月出荷の露地ねぎより高く見込まれた。



図1 栽培期間中(左)および調製後のリーキ(右)

表1 株間がリーキの収量性におよぼす影響(2011および2012年の平均値)

処理	調製株率 ¹⁾ (%)	葉鞘径 ²⁾ (cm)	調製重 ³⁾ (g/本)	調製収量		
				合計 (t/10a)	葉鞘径3cm以上 (t/10a)	(%)
株間15cm	53	4.0	487	1.9	1.8	94
株間10cm	65	3.8	406	3.0	2.7	91
株間5cm	83	2.7	253	4.6	2.3	47

¹⁾調製本数÷定植本数×100 調製本数は、定植本数から病害による欠株や奇形により調製できない株を除いたもの。

²⁾茎盤から10cm高。

³⁾根、枯死葉、腐敗した葉鞘外部を取り除き、葉を10cm程度残した。

表2 窒素施肥がリーキの収量性におよぼす影響(2012および2013年の平均値、株間10cm)

処理	基肥 ¹⁾ (kg/10a)	分施 ²⁾ (kg/10a)	調製株率 (%)	葉鞘径 (cm)	調製重 (g/本)	調製収量		
						合計 (t/10a)	葉鞘径3cm以上 (t/10a)	(%)
無窒素	0	0	86	2.8	194	1.9	1.2	60
N20分施	10	10	85	2.9	233	2.2	1.6	71
N25分施	15	10	78	3.7	337	2.9	2.7	93
N30分施	15	15	76	3.4	288	2.5	2.1	84

¹⁾化成肥料を使用。

²⁾化成肥料および被覆燐硝安カリ40日タイプを定植後60日目に半量ずつ施用。

表3 リーキの栽培法

品種	「ポトフ」(コート種子)
育苗 (株間)	3月上旬播種(育苗日数は60~75日程度)。1粒播用ポットシーダーを用いて、株間10cm用のチェーンポットに播種(1粒/ポット)。定植前に草丈15~20cm程度に剪葉。
畝間	90cm(栽植密度11,111本/10a)
施肥	施肥量は、N-P ₂ O ₅ -K ₂ O=25-20-30kg/10a。基肥：N 15kg/10aを化成肥料で施用。分施：N 10kg/10aを被覆燐硝安カリ40日タイプと化成肥料で5kg/10aずつ最終培土時(定植後約60日目)に施用。
定植	5月上~下旬定植。チェーンポット式簡易移植器(株間10cmチェーンポット対応型)を使用。ねぎ用の同移植器がある場合、別売のアタッチメントを装着することで同様の定植が可能。
培土作業	定植後約30日に土戻し、60日目を最終培土。培土の深さは15~20cm。
防除	ねぎに登録のある薬剤が使用できる。
除草	最終培土後は機械による畝間の中耕除草ができないため、ねぎに登録のある除草剤の活用や手取り除草を適宜行う。
収穫・ 調製	10月中旬~11月上旬収穫。枯れた外葉を取り除き、販売先の要望に応じて調製(例：葉を10cm程度残す、全長40cmとする、等)。
留意事項	腐敗病、葉枯病およびネギコガの発生が認められる。